

図 3 の写真の前に戻る。ルート決定の経過を振り返っておく。

大阪労山ニュース 7 月号の「山楽登山の世界 50」の図 1 と合わせて述べる。図 4 は、クライミング開始前のルート確認の様子である。2733m 峰から上部はナダレが激しく近づけない。2658m 峰に登ればあとは稜線なのでルート完登の可能性は高い。テント場で議論したとおり 2658m 峰と 2733m 峰の中間ルンゼにはラビーネンツーク(図 4 の L 印、ナダレの

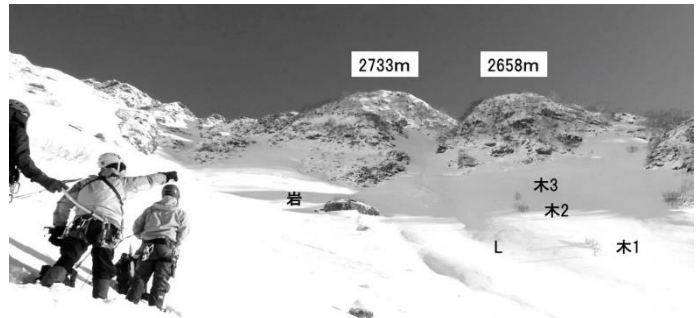


図 4. 図 3 の前、ルート確認の様子。

通り道のこと)が見られたのでここは登れない。2658m 峰を右下から巻いて登り稜線に出る必要がある。

写真のように、木 1、木 2、木 3 が雪崩を生き延びて残っている。そこで、これらの雪の下には尾根地形があると推論し、木 1、木 2、木 3 をたどれば雪崩を避けられるはずだと判断した。下山後、夏姿の Google Earth を調べたら、「山楽登山の世界 50」の図 1 のとおり尾根が発見され、5/3 の判断が正しかったことが分かった。またひとつ、ナダレを学んだ。これは我々に大きな収穫だ。

稜線から 2658m 峰、2733m 峰、最高到達点へ

稜線の雪は、新雪ほど柔らかかではないが春山特有の安定した堅い雪ではなく、木々の上に不安定に乗っかっているだけだった。雪は時折陥没し登行はなかなかかどらない。杉川は 3P 目終了点にアルパインハーケン 2 本を打って確保点とした。4P 目は中谷リードでやや急な雪田を登り 2658m ピークへ。

5P 目は傾斜がぐんと落ちたので、コンティニューアスで速度を稼ぐ。11:30、6P 目。核心部だ。2658m 峰と 2733m 峰をつなぐ稜線が左右に崩れて切り立っている。雪がやや不安定に見えたので、杉川リードで慎重に進む(図 6)。登ってみると割と安定で、ほっとした。「おーい、ここは杉川のリッジと呼ぼうか」などと、余裕の声がひびく。



図 5. 6P 目、両側が切れたリッジの不安定な雪のルートをリードする杉川。青空を背景に快適なアルパインクライミングだ。目指すは 2733m ピーク。

6P 目を終えたところでロープをほどき、ペースを上げることにした。こうなると、年老いた中川はつらい。間隔がぐんぐん開いていく。ひいひいだ。やがて 2733m に達した。ここまで来ると視界が一気に開け、東稜の全容が初めて見えた。夏の取付きは、図 5 ルート図の「ゴジラの背」の下の 2 本の点線ルートであるが、本日 5/3 はさすがに誰も登っていない。東稜には、我ら 4 名だけだ。ゴジラの背や北穂高岳頂上をしばらく眺めていたら、ふいに、ゴジラのコルから、でっかい雪崩が落ちてきた。春ナダレらしくザワザワと落ちてきた。びっくりだ。中谷があわてて動画

を撮影した。

ロープを回収していた松田がラストで登ってきた。なんだか遅れ気味だ。何があったのかと尋ねたら、「アイゼンが片足、無くなった。しばらく探したが、ついに見つからず、困っている。」と言う。途中でアイゼンが壊れたので無理やり固定して登って来たが、外れていたという。

これはえらいことだ。時刻はすでに 12 時を回っている。ここから東稜上部の夏季登攀ルートが始まるのだが、中川は大分へばっているのが先が不安だ。

また、松田が片足アイゼンでカチカチになった北穂高岳南稜を下るのは至難の業だ。

緊急会議を招集した。今からでもゆっくり登り小屋に泊まり、雪がゆるむ昼間に南稜を下ればアイゼン片足でも OK か？などの意見もあったが、明日の天気がいまひとつ不明だし、アイゼン片足でのクライミング続行はまずいだろうとの点で合意となった。結論は撤退だ。

撤退-懸垂下降

時刻は 13 時前。春の陽光が照りつけ、ナダレ発生の危険が高まる時刻だ。ブッシュづたいに 100m 超を懸垂下降して陽が傾くまでそこで待機し、日陰になったら沢を一気に横断して南稜下降路に合流する作戦を考えた。

ルート図の懸垂開始地点を定めるのに約 30 分を要した。積み重なった岩に 2.4m スリングをかけて 50m ロープ 2 本をダブルにセット。ロープが絡まらないようにロープバッグを使って、杉川が最初に降りた。50m 降りたところの丈夫なブッシュで 2 ピッチ目の下降点を作った (図 7)。杉川が 1 ピッチ目下降中に、下降ラインのすぐ左側でナダレが発生。図 6 からその規模を推定すると、幅 10m 長さ 200m 深さ 10cm。雪の密度を 0.5gcm^{-3} と仮定すると、総重量 1000 トン。このサイズの体育館マットで押し流されるようなものだから、その破壊力は甚大だ。ブッシュの中を下降することによって期待どおりに雪崩を避けた。読みが当たり、やられなくて本当によかった。

我々は谷を渡る前の地点 (ルート図で懸垂下降の矢印の先端付近) でじっと待った。春の陽はどんどん傾きそれとともに足元の雪が堅く締まってきた。16 時、日陰に入った。よし、行くぞ。松田がリードで谷を渡り 100m ロープを伸ばす。ルート図の「モレーン」の盛り上がりの真上くらいまで達した松田が「よーし、

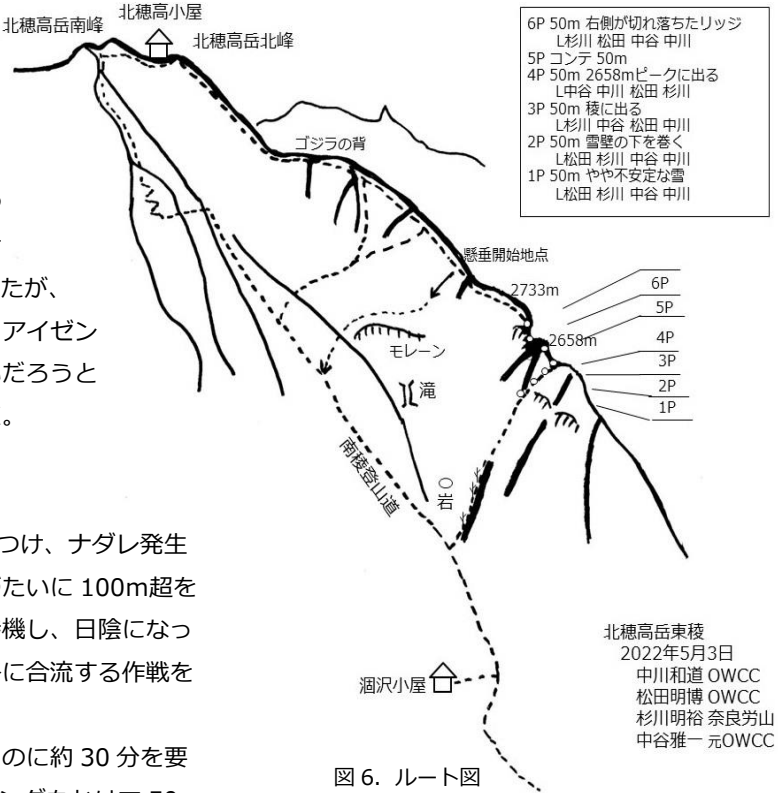


図 6. ルート図



図 7. 懸垂 2 ピッチ目の地点から 1 ピッチ目終了点の 3 名を見上げて中川撮影。1 ピッチ目懸垂中に左側を落ちていったナダレの跡がくっきり見える。

安全」のコールをくれる。全員、無事に谷を渡った。

4人は疲れた体に鞭打って南稜を下った。ありがたいことに天気はもってくれた。17:30 無事テント到着。中川のパーティーはいつも登攀終了点で手袋を脱ぎ、素手で握手を交わす慣わしがある。今回は、無事帰還を果たしたテント場が終了点だ。4人はしみじみと握手を交わした。近くのテントの方に記念写真を撮ってもらった(図8)。



図8. テント帰還 17:30 記念写真。左から杉川明裕、中谷雅一、松田明博、中川和道。夕日が山を染める。

5/4月：晴 下山の日だ。昨日40張くらいあったテントのうち約20張を残し、下山する人が多い。となりのテントの女性2人組に「どこに登られたんですか？」と聞いたら「山に登るのは自分達には危ない。涸沢からのこの景色だけにあこがれて、やってきました。満足です。帰ります！」。うむ、純粹だ。これも、ええなあ。

8:30 テント場出発。何だか荷物が軽くなっていないようだと言った中川が愚痴をいう。下るとどんどん雪が消えていく。10:30頃、屏風岩下を通過した。夏姿だ。

来るときにも立ち止まった岩小舎跡に、また立ち止まる。石岡繁雄先生など往年のクライマーたちが闘志を燃やした場所で、先生から何度も話を聞かせていただいたものだ。「つわものどもが夢のあと」そのものだと感慨をあらためて強くした。

上高地着 14:00。涸沢から上高地までの道、中川にはこれが本当に遠かった。途中でとうとう音を上げ、杉川さんにロープなどを持ってもらった。感謝々々だ。この借りは返そう。

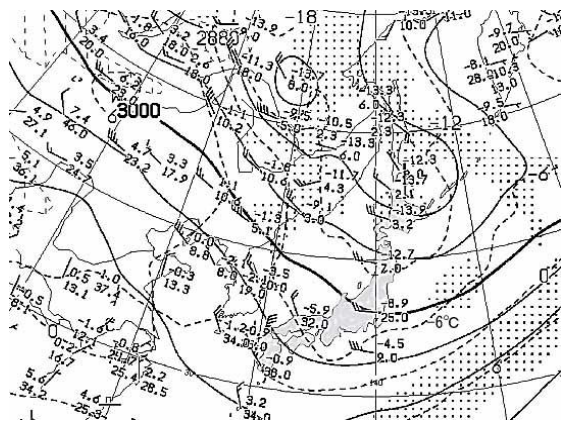


図9. 5月3日9時の700hPa高層天気図。-13.7°Cの寒冷渦の気圧の谷に覆われた穂高は-4°Cであった。

テクニカルノート

気象：今回は典型的な寒冷渦を伴う大きな気圧の谷にすっぽりと覆われ続けた(図9)。八ヶ岳や大山への転進も検討したが雪がなかったのをやめた。穂高の mountain-forecast.com(図10)では悪天が持続しない予報だったのでそれに期待して入山を決行した。実際の穂高は予報どおりみだら模様の天気。本文のとおり、ナダレと風雪の難しい判断だった。

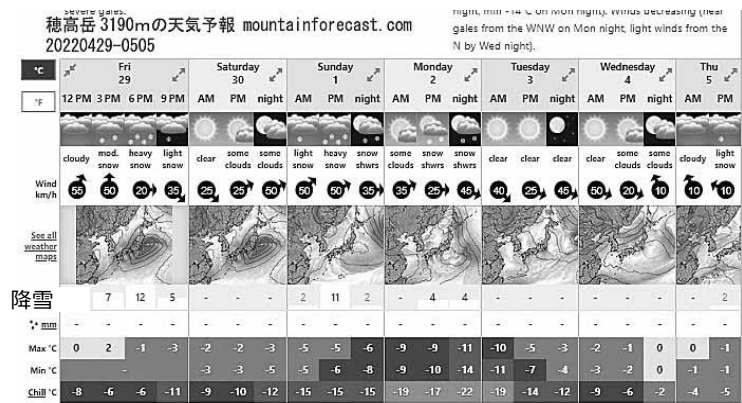


図10. 4月29日から5月5日の mountain-forecast.com の予報。4/29のまとまった降雪で穂高は真っ白な冬姿になった。5/1は高度2000m以下はまとまった雨、涸沢ヒュッテから上部は雪だった。5/3-4は好天。

ルート決定：ナダレを避けてルートを決めるうえで Google Earth の利用が有用であることが分かった（大阪府山ニュース 2022 年 7 月号「山楽登山の世界 50」も参照）。研究をさらに進めていくと大きな成果が得られそうである。

行動：コロナ原因のトレーニング不足のため登攀スピードが落ちている現状を考えると、5:50 出発はいかにも遅かったと松田は指摘した。要改善だ。

装備：雪稜クライミングなので 8.5mm50mロープ 2 本を 4 人で用いることとした。リードとラストは確保を受けて登るが 2 番と 3 番は固定ロープ登攀とした。このやり方は適切であった。スノーバーは各自 1 本計 4 本でギリギリであった。アルパインハーケン（各自 1-2 本）は極めて重要かつ適切であった。最大の反省材料は松田のアイゼン故障であった。もっと本格的なクライミングだと致命的になった危険があり、反省を要する。

トレーニング・体調管理：中川は、ポッカトレーニング 21kg-3.5 時間を日常としてきたが、上高地→涸沢の 9 時間行動には明らかな不足を感じた。見直す必要がある。また、中川・中谷は腰などに問題を抱えていたが、ホッカイロをうまく活用して問題を回避できた。これにより雪山のアルパインクライミングを続行できそうである。

感想

中谷雅一：私にとっては、久しぶりの春山だ！しかもテント泊、右脚が悪くなり手術をしてからは、長時間あまり重いザックは担いでなかったため、テント泊と冬山装備を担ぐことに備えて歩荷トレーニングを行った。しかし、上高地から涸沢まで 22~23 kg のザックを持って登れるのか不安だった。何とか行くことができ本当に良かったです。

山行の初日、上高地は雨がしとしと降り、途中からは雪に変わり全身がずぶ濡れになったので、急遽テント泊から小屋泊まりへの変更は非常に有り難かった。次の日からは久しぶりのテント泊だったので、中川さんから聞いていた防寒対策にホッカイロを持って行き、手、足、腰に当てていたため比較的よく寝れました。

北穂高東稜ルートは、私は初めてですが、雪も多くて所々雪崩れていて怖かったです。雪稜の登攀は、松田さん、杉川さんに続いて 3 番目に登りました。雪の状態は、柔らかくアイゼンがあまり効きません。

私がトップで登った時も、板状の大きな岩が所々あり雪も柔らかいため登り難かったです。でも久しぶりの雪稜登攀は緊張感もあり非常に充実していました。ビレイポイントまで上がり、比較的大きな樹木にセルフをとり、後続者の足場を作るためにバケツを掘ることとセルフビレイのために長めのスリングを事前に準備すること等、しなければならぬ細々としたことを忘れており、中川さんからご指摘を受けました。

東稜の稜線に出た後は皆さん比較的快適にピッチは進みましたが、時間切れで撤退となりました。撤退するためには、この場所からだと懸垂下降をしなければならず、懸垂下降に適した場所を探すが、この付近には樹木も無いため残雪から所々出ている大岩で支点となる場所を探した。ここからだと少なくとも継続して 2 回の懸垂下降をしなければならず、2 回目の懸垂下降が出来る支点になりそうな樹木を探した。

4 人で検討した結果、スリングを残置できそうな大岩を支点場所と決めて懸垂下降を 2 回した。その後、危険な雪崩のデブリの下をトラバースする必要があるため、雪崩の危険回避のために日陰で少し待機した。先頭の松田さんがトラバースする間は、トラバース上部を集中して観察し雪崩が来ないか注意を払い全員が無事にトラバースを終了できて良かったです。

今回の春山山行では、貴重な体験をすることができ、本当にありがとうございました。大岩に残置スリングを設定して懸垂下降したり、雪崩を避けるために日が陰るまで待機したりと非常に貴重な体験をしました。

どうも有難うございました。

杉川明裕： 今年の春山は本当にいい経験になりました。ルートファイディングと、雪崩の怖さです。

沈殿中も涸沢カールは雪崩発生の多いこと。しかも降雪直後はすごかったです。

特に懸垂下降中、少し雪を落とすと転がった先で点発生の雪崩になる様子を見ていると本当にこの場所から脱出できるのか不安になりました。今回ほど雪崩に巻き込まれる恐怖心を感じた事はありませんでした。

今回はスノーバーを1人1本ずつ持っていました。やはりスノーバーはアルパインクライミングでは必須だなと感じました。雪崩エリアを越える時でも支点を素早く作るにはスノーバーが1番早く確実でした。懸垂下降後、雪崩の巣をトラバースする時も勉強になりました。

支点を作りセルフビレイをとりしばらく待機していました。やはり夕日にあたっているカール地形の雪面はいつ雪崩が起こってもおかしくない。気温が下がってから突破する。確かにトラバース中に雪崩が起こる確率を考えればそこでの待機、観察の時間は大事だと学べました。

あと今回登ったルートですが夏ではほぼ登れないルートだと思いました。雪が付いたらそこは登れるルートになる。これがアルパインクライミングの魅力なのかなと思いました。

今回の山行で一緒にさせていただき、まだまだ勉強しなければいけない事が多々あると実感しました。

今後ともよろしく願いいたします。

**松田明博・中川和道からの補足：屏風岩雲稜
ルートの扇岩テラス崩落？**

扇岩テラス崩落のニュースを聞いたので、今回、写真を撮影したところ、大崩落はテラスの左側であり扇岩テラス自体は存在しているように見えた。誰か、登って見たら、ぜひ、報告して下さいませんか？

